

[20] 舞踊言語のシルエット

ローラン・プティ振付『失われた時を求めて』

1993年1月8日 東京新聞 夕刊

● ベルリエポックの空気が

バレエ界の鬼才ローラン・プティの『失われた時を求めて』が、昨年十二月十六日、日本で初演された。言うまでもなく、マルセル・ブルーストのあの長編小説のバレエ化である。この小説を長年読んできた私は、大きな期待をもってその舞台を見に行った。

全編を十三の情景として構成したものが、なんとも感動的だったのは幕開け。小説でおなじみのヴェルデュラン夫人のサロンがそこに現前して、今世紀初頭ベルリエポックのパリの濃密な雰囲気がたちこめた。凝固したように動かぬ人物たちの間を、ヴェルデュラン夫人がゆっくりと歩く。片隅にはブルー・ストその人が、エミール・ブランシュ描くあの有名な肖像画そのままに座っているではないか。この場面だけでも舞台化の意味はあったと、あるブルースト学者は幕間のロビーで言った。

その翌日、私はプティと語る機会を得たが、彼はこの長い小説を全都で四回読んだそうだ。一度目は若すぎて理解できなかった。四十歳のとき改めて読んで、啓示を受けたとも言えるほどの感動を覚え、バレエにすることを思いつく。早速フランソワーズ・サガンに台本を依頼したものの、これは映画向きでバレエには向かないと判断して却下。自分で台本を書くために、全編を三度目に通読した。四度目は自分のバレエのために選んだ箇所を精読。実際の振付作業には二年をかけている。

その台本だが、ふつうのバレエの台本とかなり趣が変わっていて、まるで文学の註釈書みたいだ。左側の欄には、小説のなかの問題の部分が引用とともに挙げられ、その解釈が示されている。右側には、それに対してプティ自身がふくらませたイメージ。

[20] 舞踊言語のシルエット

ローラン・プティ振付『失われた時を求めて』

1993年1月8日 東京新聞 夕刊

ここに書かれているプティの文筆はなかなか文学的で、ちょっとした短文のエッセイか散文詩のように読ませる。そしてその下に、振付のための簡略なメモがある。

小説をそれほど読みこんだだけあって、というか、それほど読みこんだにもかかわらず、と言うべきかもしれないが、バレエ作品のほうは、しっかりとプティ自身の感性や文体が生きていて、ブルーストにのめりこんだあげく自分を失ったというところが面白い。しかも、ブルースト文学の読み取りもそれなりに的を射ているのだ。

その点が、私には殊のほか興味深かった。大体がブルーストという作家は、じつに執拗な感化力を持っていて、深く読めば読むほど、読者はいつのまにかブルーストの言語でブルーストの物の見方をするようになるのである。

● 具体化と抽象化

実際の舞台はどうなっているかという点、小説内の世界がそのまま血肉化したかと思われる第一景のあとは、装置もシンボリックな単純なものになって、文学的なテーマが現代バレエの抽象的な手法によって描き出される。

たとえば小説のライト・モチーフとして重要な意味を持つ「ヴァントイユの小さな楽曲^{フレイズ}」。これはなしる音楽そのものについて語る箇所だから、まさかダンスにはならないだろうと思っていたら、ヴァイオリンを表す男性舞踊手、ピアノを表す女性舞踊手のパ・ド・ドウになっている。「さんざしの花蔭」は小さな日傘をかざした女性の群舞。そのあいだを主人公の憧れの少女ジルベルトが舞う。

[20] 舞踊言語のシルエット

ローラン・プティ振付『失われた時を求めて』

1993年1月8日 東京新聞 夕刊

またスワンとオデットの性的交渉を描く第四景「カトレヤをする」は、オデットの手管に魅惑されていくスワンの心理が、振付という身体言語に翻訳されているし、第七景「眠る彼女をみつめる」では、愛人アルベルチーヌの心をとらえきれず憐愍し、彼女の眠りにひとときの安らぎを得る「私」の思いが、アルベルチーヌを演じるドミニック・カルフリーニのおおやかな姿態と脚線に造形化されている。踊りだから、とうぜん体は激しく動く。しかしその動きそのものが睡眠と凝視という、いわば内的な宇宙を表現しえているのだ。装置も、寝台の長さの白い紗の幕に、まばらに浅緑を刷いて、朝日を思わせる斜光が影を落とすといった単純なものだが、その甘美でデリケートな感覚には舌を巻く。

舞踊として私が一番好きだったのは、第十一景「闇のなかの予期せぬ出会い」。茜色のホリゾントにシルエットで浮かぶ、上半身裸の男三人女一人の踊りである。この場面にはプティ自身の体験が反映しているのだそうだ。戦時下の闇にまぎれて無名の愛を求め人々を描いているのだが、第二次大戦のパリ空襲（ブルーストが語るのは第一次大戦）の時、メトロに避難した人々が、灯火管制の闇のなかで愛をむさぼった。この話をしながらプティは、椅子から立ち上がって実演してみせた。

しかし、このバレエが今のように世界で評価されるまで、その道程は多難だった。一九七四年に初演したとき、フランスの批評はとて冷たかった。思うに、サガンの台本をそのまま採用していたら、あるいは舞踊言語に置き換えず、一種の活人画のレベルにとどまっていたら、むしろ批評は好意的だったのではないだろうか。